

平成19年度スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告（要約）

① 研究開発課題	
「持続可能な開発」に創造的に取り組む科学者・技術者を育成する教育課程の研究	
② 研究開発の概要	
<p>地球規模で思考でき行動できる人材育成の基盤を「持続可能な開発のため教育（Education for Sustainable Development）」（以下ESD）に求め、科学者・技術者に必要な基礎的な能力、とりわけ創造力を育成するために必要な教育課程・教育内容を開発することを主要な目的とする。そのために以下の（1）～（5）の教育内容の開発研究を行う。</p> <p>（1）先端科学の内容と先端科学を支える創造性を学ぶ教育プログラムの開発 （2）教科学習における創造性を育むための教育内容・教育方法の開発 （3）ESDの内容開発 （4）学校設定科目の開発 「サイエンスコミュニケーション」, 「数理解析」, 「宇宙・地球科学」, 「生命科学」 （5）海外研修プログラムの開発</p>	
③ 平成19年度実施規模	
<p>全校生徒を対象とする。高等学校第2, 3学年にはスーパーサイエンスコース（以下SSコース）を設置し、当該コースにおいては理数系に重点を置いた教育課程を編成する。また、中学校教育との連携を強化し、一部のプログラムでは中学生と高校生の異学年で協同学習を行う。</p> <p>（平成17年度入学生200名そのうちSSコース38名, 平成18年度入学生200名そのうちSSコース36名, 平成19年度入学生199名）</p>	
④ 研究開発内容	
○研究計画	
年次	実施計画
	<p>①先端科学の内容と先端科学を支える創造性を学ぶ教育プログラムの開発 ②各教科における創造性を育むための教育内容・教育方法の開発 ③ESDの内容開発 ④学校設定科目の内容開発 ⑤海外研修プログラムの開発</p>
第1年次	①特別講義, 研究室訪問学習, 研究実践学習, 宇宙・地球科学研修, 課題研究を実施する。
	②全教科の計画に基づいて, 中学校および高等学校の両方で実施する。
	③開発テーマに沿って小単元を実施する。
	④通常の授業時間を利用しながら, 教育内容の開発およびその評価を行う。
	⑤オーストラリア研修において, 自然環境保全を学習するプログラムを開発する。
第2年次	①特別講義, 研究室訪問学習, 研究実践学習, 宇宙・地球科学研修, 課題研究を実施する。
	②全教科の計画に基づいて中学校および高等学校の両方で実施する。
	③開発テーマに沿って小単元を実施する。

	④開発した内容を実施し、教育内容の妥当性を検討する。
	⑤オーストラリア研修において、自然環境保全を学習するプログラムを実施する。
第3年次	①特別講義，研究室訪問学習，研究実践学習，宇宙・地球科学研修，課題研究を実施する。
	②全教科の計画に基づいて実施する。
	③E S Dの開発した内容を実施し，教育内容の妥当性を検討する。開発したE S Dの内容をまとめる。
	④実施予定の学年・クラスで実施し，教育内容，方法の充実を図る。
	⑤ユネスコ協同学校プロジェクトネットワーク（Associated School Project Network: ASPnet）を活用し，海外A S P校との連携を検討する。
第4年次	①第3年次までの成果を踏まえ，特別講義，研究室訪問学習，研究実践学習，宇宙・地球科学研修，課題研究を実施する。
	②第3年次までの成果を踏まえ，各教科の計画に基づいて新たな視点で創造性の育成を検討する課題で研究に取り組む。
	③第3年次に引き続き内容のまとめを行う。
	④第3年次までの成果を踏まえ，研究開発の成果をまとめる。
	⑤オセアニア地域以外におけるA S P校との交流プログラムを開発する。
第5年次	①これまでの成果を踏まえ，プログラム全体を再評価し，創造力を育成する科学プログラムとして完成させる。
	②教科毎に研究の総括を行う。
	③ユネスコ協同学校としてE S Dの国際的な活動に主体的に参画する。
	④作成した教材を使用し，教育内容を検証する。
	⑤オセアニア地域以外のA S P校との交流プログラムを実施する。

○教育課程上の特例等特記すべき事項

平成18，19年度入学生のS Sコースにおいては学校設定科目を実施するため、「家庭総合」4単位のうちの1単位および「情報C」1単位を減ずる。

○平成19年度の教育課程の内容

平成18年度入学生のS Sコースにおいては，学校設定科目「数理解析」1単位，「課題研究」2単位を開設する。

平成19年度入学生のS Sコースにおいては，次の学校設定科目を開設するための準備をしている。

「サイエンスコミュニケーション」1単位，「数理解析」1単位，「宇宙・地球科学」または「生命科学」3単位，「課題研究」1単位

○具体的な研究事項・活動内容

(1) 先端科学の内容と先端科学を支える創造性を学ぶ教育プログラムの開発

科学に対する興味や関心を中学校段階から持たせるために，中学生を対象とした特別講義や体験型プログラムの開発を目指した。本年度は中学生のために3つのプログラムを準備した。高校生対象のプログラムは特別講義，研究実践学習，課題研究などを実施した。

(2) 教科学習における創造性を育む研究

教科毎に創造性を育む教育内容・教育方法と，創造性を評価する方法の開発を目的とした実践研究を行った。「自己質問カード」を利用して，単元毎に生徒に学習内容に基づく質問を考えさせ，自己質問を作成させるなどの取り組みを通して，メタ認知の働きを支援する授業づくりを行う実践研究を試行した。

教科	研究テーマ
国語	思考と表現を通して学習者自身の言語活動としての「創造」を体得させるため

	の教育内容・教育方法の研究
地理歴史 ・公民	「持続可能な社会」を担う生徒を育成するための教育内容・教育方法の研究
数学	創造的な思考を継続させるための数学的な見方や考え方の研究
理科	科学的思考力の育成における創造性の認識過程に関する研究
保健体育	動作の視点から、身体（骨格・骨格筋）の構造について理解し、合理的な「運動」について考える
芸術	芸術作品における美的要素の科学的分析および創造的活動への応用
英語	創造性育成のための自己質問カードを活用した読解授業の構築
技術・家庭	「ものづくり」を通じた、認識過程の変化の研究
情報	制作活動を通して創造性を培う

- (3) 「持続可能な開発のための教育（以下E S D）」の内容開発
S S H指定校・ユネスコ協同学校（ASPnet）加盟校として、「持続可能な開発のための教育（E S D）」を学校全体の教育活動を通して行った。
- (4) 学校設定科目の内容開発
今年度は「数理解析」1単位の内容開発を行った。
- (5) 海外研修プログラムの開発
オーストラリアにおける環境保全について学ぶ取り組みを行った。

⑤ 研究開発の成果と課題

○実施による効果とその評価

1 生徒に対する効果

アンケート調査の結果、S S Hプログラムを実施する前と後とでは、S S コースの生徒に対して次のような効果が認められた。

- ①生徒の自己効力感が高いまま維持された。
- ②科学の学習方法の重要性を感じている。
- ③科学を学習する価値を認識している。
- ④科学に関わる職業への関心が高い。
- ⑤S S コースの生徒も一般コースの生徒も科学者のイメージに変容は見られない。

2 保護者への効果

「理科・数学に対する能力やセンス向上に役立つ」など、S S Hを好意的に受け止めている。

3 教員への効果

S S Hは好意的に受け止められている。教員間の協力関係づくりには改善の余地がある。

4 学校体制への効果

中学校、高等学校を通じた新たな研究の枠組みづくりがなされ、研究の推進体制が整った。

○実施上の課題と今後の取組

1 先端科学の内容と先端科学を支える創造性を学ぶ教育プログラム

研究者と創造性をテーマにして交流する時間を十分に確保する必要がある。宇宙・地球科学研修では、余裕のある日程で実施したい。

課題研究と、学校設定科目「サイエンスコミュニケーション」との連携をはかり、S S Hの成果について効果的な普及に努める。

2 教科学習における創造性を育む研究

創造性を引き出すような教材の選択や授業展開を行うとともに、生徒が自己質問をつくることに喜びを感じるような工夫も同時に行う必要がある。「教えて考えさせる」という自己質問カードの原点に立ち返ることが必要である。

3 ESDの内容開発

生徒に「持続可能」という視点で諸問題を考えさせたところ、自主的に地球規模の諸問題に関心をもち、積極的にこれを解決しようとする意欲・態度が芽生え始めた。継続的・体系的に実践を積み重ねることが今後の課題である。

4 学校設定科目の内容開発

学校設定科目は今年度は「数理解析」1単位のみ開発研究を行った。数学科の中で、教材の配列を検討することが課題であるように思われる。

次年度は「数理解析」，「サイエンスコミュニケーション」，「宇宙・地球科学」，「生命科学」の開発を行う。

5 海外研修プログラムの開発

オーストラリア研修に、ホームステイ先の家庭・地域から環境保全の取り組みについて学ぶプログラムを盛り込んだ。